

今、父に伝えたいこと

女の子でも自分の将来を決められる

黄 瑞 (コウズイ)

「自分の将来を自分で決める」、こんな普通のこと、私にとってはとても難しいことなのです。それは私が女の子だからです。

私は中国の少数民族トゥチャ族の出身です。トゥチャ族には、「女性は二十歳までに結婚して家庭に入る」という暗黙のルールがあります。私の母も大学へ行きたい気持ちを口にできないまま、二十歳で結婚しています。今、私は二十歳ですが、故郷の同い年の女の子たちは、もうほとんど結婚して、主婦として子供を産み、育てています。

私が生まれた時、祖母は「なんで女の子なのよ。男の子だったらよかったのに。」と嘆いたそうです。同じようにがっかりしていた父に、母は「この子はあまり泣かないし、きっと強くて逞しい女の子に育つよ。」と言い、その後、私は男の子のように育てられました。男の子のような髪型で、武術を習いました。12歳の時、父は全く泳げない私を川に落とし、「泳げなければ、自分の力で何とかしなさい！そんなんじゃ、これからどうやって生きていくんだ！」と、泳ぎの練習をさせました。あの時、私は悔しくて「私は女の子だよ！男の子みたいに育てないで！」と心で叫びました。

ある日、「ダンガル きっと強くなる」という映画を見ました。その映画は、男尊女卑の風潮が根強いインドの田舎の話です。「女の子にレスリングなんて」という村人たちの偏見をものともせず、娘のレスリングの才能を見出した父親が、厳しいトレーニングを課し、世界チャンピオンに育て上げるという実話に基づいています。その中に、父親に逆らえず、毎日いやいや練習をしていた娘に、すでに結婚した友達が「私もそんな父親がほしいなあ。そんなに真剣に向き合ってもらえて羨ましいなあ。」と言うシーンがあります。私はそのシーンを見て、突然、父の顔が頭を通り、父の深い愛を感じ、涙が溢れてきました。

現代社会において、女性の力が必要な場面も多々あります。古き良き伝統を後世に受け継いでいくと同時に、必要に応じて変化させていく勇気がなければ、時代の流れに乗り遅れ、取り残されてしまう恐れもあります。

私が「大学に行きたい」と言ったとき、心から納得したようではなかったのですが、父は私を大学に進学させてくれました。

「お父さん、私に将来を自分で決めるチャンスをくれて本当にありがとう。おかげで私の人生が色づき始めました。私は強くて逞しい女の子です。」これが二十歳の私が父に伝えたいことです。